

## 文理分離の実態と課題

### Current Situation and Problems in a Segregation of Humanities and Sciences

山形大学 河野銀子

Yamagata Univ., Ginko Kawano

E-mail:ep252 @kdw.kj.yamagata-u.ac.jp

本発表は、日本社会に広く流通している「理系」「文系」という知の分類に着目し、その実態を探ることで、科学技術分野のダイバーシティ推進の参考となりうる課題の提示をめざす。

研究開発の場はもちろんのこと、個々人の暮らし方や生涯の過ごし方、地域コミュニティ形成の方法等、現代社会のさまざまな次元の問題解決やイノベーションに、多様な視点や思考が必要とされている。多様性の確保には、一人一人が柔軟で多様な視点や思考を身につけることが欠かせないが、それはそう簡単ではない。われわれは自身の生きる文化に埋め込まれており、その文化内で共有される価値観やふるまいを知らず知らずのうちに身につけているからだ。こうしたメンバーで構成される集団は同質性が高く、従来と異なる方法や新たな価値を生み出しにくい。そのため、個々人の能力開発だけでなく、異なる経験や視点、思考等を所有する人々との共生による多様性の確保が求められている（企業における人材ダイバーシティなど）。

科学技術分野のダイバーシティを考えると、従来、その分野に従事することが少なかった非西欧人・非白人・非男性といった人々の参画が鍵となる。これら人種や国籍、性別や年齢等の属性のダイバーシティとともに考えたいのが、「理系」「文系」という知の分類である。この分類は属性ではないにも関わらず、人々の分類に使用されることがある。例えば、人材ダイバーシティの観点から、「理系」ばかりの職種・職場に「文系」を、「文系」ばかりの職種・職場に「理系」を増やすといった戦略が考えうる。そこには、「理系」と「文系」の知は違っており、多くの人々はそのいずれかを学ぶ経験をしているので、それぞれの経験に立脚した視点や思考を持つという認識があると思われる。新たな視点や思考の獲得に、異質な者との出会いが重要なのはすでに述べた通りだが、「理系」「文系」という知を修得した人間の間にとれほどの異質性があるのだろうか。そもそも、「理系」「文系」に属する知とは、どのくらい分離しているのだろうか。

本発表では、具体的諸相が不問に付されたまま広範に使用されるようになっている「理系」「文系」に着目して、その実態を把握する。具体的には、①人々の意識と、②高校カリキュラムの側面から捉える。①については、人々の意識が反映される新聞の記事検索によって、「理系」「理型」「理科系」「理工系」「理数系」および「文系」「文型」「文科系」の出現件数を分析した。その結果、いずれも1980年代半ば以降に増加し始め、「理型」は1990年代後半、「理系」「文系」は2000年代前半にピークがあるという知見を得た。また、②については、全国の高校カリキュラム（教育課程表）を分析することで、高校における「文系コース」「理系コース」の内実を探る。これらの分析を通して、われわれの社会で漠然と使われている「理系」「文系」の実態を明らかにし、科学技術分野のダイバーシティを推進するにあたっての課題を示す。